

敢えて四十年の初心を抱えて

——日本においての講演——

張 承 志

ご紹介をありがとうございます。中国の作家、張承志と申します。今からお話させていただく内容は、自分にとっても一篇の重要な作品なので、これを文章にしようという作家の希望によつて、加えてわたしの内には、六十二歳になつてから日本語をふたたび勉強しようという熱情がとつぜんに湧いてくることも確かにございますから、勝手なことでございますが、北京で書いた日本語原稿をこの場所で読ませて頂くという形で、今日のご報告を進めさせていただきます。内容はきつとお分かりにくく、日本語の不備も当然沢山あると思います。始める前にすでに不安な気持ちがいっぱいに溜まっております。とはいえ、まず何よりも、聞いてくれる皆さまのお許しをお願いさせていただきます

1

あつという間に四十年も立ち過ぎてしまい、すでに身が置かれていた環境は全くと言つていいほど、変わったと感ぜられま

す。神様を信じなくとも進んでいる中国経済は一つの奇跡だと世間で騒がれています。国民はたとえ財布はふくらんでいなくても、心の緊張を抑えて他人の前では悠然とした恰好をします。悲願である政治システムの改革はまだ何も動きが見えないにもかかわらず、どこにも不満が溢れているが文句を言う者は減りつづけてきました。四十年前、あれほどすべての人に嫌われ、厳しく糾弾され、私の場合なら、それこそが紅衛兵運動の重罪だったと痛感し続けたことなのですが、幼い頃に横行した醜い

人間差別すなわち血統論が、そのまま、いや、文化大革命後の秩序再編とともに昔より遙かにしようぶに再建されてしまいました。

昨日まで人前で貧乏像を装った人々が、今日は金持ちの格好をして威張っています。一方、テレビが毎晩のように上演する美女・変人に煽られる太平の宴、それにテロリスト掃討の報道を楽しむ民衆は、じつは自分も格差、差別、侵略に苦しむ人々への圧迫に手を貸していることを認めない。なお、過去の革命への反省や清算の番組に、深刻な顔をして滔々と喋っている知識人から軍人にいたるまでのエリートたちは、満足感を顔にみながら、自分も欧米帝国主義の新十字軍の軍用の犬になり、しかも東方文明、少なくともイスラーム文明への破壊作業の手先に成り下がってしまったことを、誰ひとりとして恥に感じていません。

さらに言わせていただければ、中国における文学や芸能の状況はさらに面白いと言わねばなりません。ノーベル賞級だと騒がれた贗物が次から次へ現われるという絶景（風景）の一面なのですが、どれもこれも「中身はわざと西側的な哲学や歴史観にびったり合わせながら、表面を新鮮に飾って西側の方々を喜ばせる」というようなものばかりで、受賞作品はほとんど西洋人の優越感に媚びた目差しを送るような物でしょう。資本主義や植民主義の価値観など原理をまもることが原則であるのは勿論、西側に媚びるといことが、中国における芸術の基本的な

作法となり、これを会得しつつ、出世の階段を登る文化人は、もう幾代も数えられるのでしょうか。

このような環境に生きなければならぬ別の種類の人々の考えと行動をご紹介します。評判の悪い紅衛兵という単語は実はこの私の造り物であったのですから、私的にも私には、紅衛兵を言う権利があると思います。そればかりではなく、四十年前の幼い紅衛兵の頃に戻らせて頂くこと以外、今の私には話を始める入口が見つけれないのです。

2

今に至ってようやく、混乱の時代であった一九六〇年代に対する思いが、整理可能となりました。辛いのですが結論は次のようになる以外にありません。つまり、確かにわたしたちの運動に啓発されたであろう世界の六十年代の人の中で、わたしたちだけが体制派だったことに、何回も驚かされました。古くから独立した個人観点などを持たなかった奴隷に近い縁起を持つ昔の仲間たちは、後になって今、新たにできあがった体制の要請に従順な態度で、過去を全面否定する結論に到着したのも無理もないことでしょう。

文革、そして中国革命、世界各地に起こった革命、それにイスラームに対する次から次への否定は、人々の血まみれの悲劇

や過去に対する真摯な反省を汚し続けています。それはメデイア煽動によってさらにグローバル化されながら、資本主義の世界進軍のラッパ吹き合奏の中で、凶悪な一部と化して墮落している、と私は言いたいのです。

ところが世界的な視野から見れば、ヨーロッパからラテンアメリカまで、いわゆる六〇年代に決起した若者は、異なった環境での自由さを利用して、いたる所で圧迫された民衆を支持する戦いに、熱情から鮮血、特に一九七二年前後には、生命までも捧げていたのです。このことを分かり続けた私は、世界に公理が生きていただけでなく正義も輝いて眩しいものだったあの歴史の一ページに感動させられました。

もし、次の話を「アラブ赤軍」という一つだけのグループに限定することを、まずお断りさせて頂けるなら、勝手ですが話を本音で進めたいと思います。

私は、中国にいる時、友人とパレスチナの問題を討議した時に、日本のアラブ赤軍のことに触れなければ話は済まない、と強く感じられました。テルアビブ空港で奇襲を執行した時、自らの身に爆弾を覆い、一般乗客を守ったと伝えられる安田安之、そしてイスラエル軍による非人道的な拷問に耐えてほとんど植物人間にまで仕上げられた岡本公三、三十年一日の如くイスラエルのパレスチナ占領に対して平和抗議を行い続けた末、五十四歳で日比谷で焼身自殺によって最終抗議をした檜森孝雄、などの話を私は書物から引用しながら語ってあげたその時、友

人たち特にムスリムたちの目に浮んだ涙が忘れられません。

私たちは、土から水まで奪われてしまつて、しかもファシストの造つた牢屋のようなゲートに閉じこめられたパレスチナの人々の絶望的な現実を眺める度に、またパレスチナの兄弟とともに世界的な封鎖を味わう日々を過ごしている毎日の中で、あらためて違う背景違う国からさまざまな人々が皆パレスチナへの支援に向かった一九七二年は、世界現代史における偉大な頂点だったと、私は認識しています。アラブ人ならオカモトコウゾウという名を知らない人はいないと反対に、私たち紅衛兵の若かつた頃にやつた無知な破壊や他者差別は、いったいどう清算されれば良いのかと思いつづけて来ました。長い模索を重ねた末、過去に対して恥ずかしいという感覚をいだく一方、公理や正義の代わりに暴行や嘘が横行し、この流血と圧迫があまりにも多すぎる世界秩序に、筆を持つて妥協せず抵抗するという結論に至る以外に、意義あるものはあり得ないと考えております。

こうして私は、財布もふくらんで偉くなるといわれる中国国民の例外のひとりとして日本に参る時、おたがいナシヨナリズムを確認するためではなく、オカモトコウゾウ、檜森孝雄などの英雄の名を、この年取つた紅衛兵の遺恨が満ちる胸に刻んで、日本のアラブ赤軍への追悼の念を抱えながら、新たなアジア主義、さらに真のインターナシヨナリストの道を探りたいのです。

ちなみに、拙著の日本観察記である『敬重と惜別』という本に、以上に述べさせて頂いた心情をも含め、「赤軍のムスメ」として一章にまとめました。インターナショナルリズムへの長い旅に向かう日本像を書いた、この章は、共産党員の編集する右派雑誌なら言うまでもなく、たとえいわゆる左派雑誌でも、赤色に遠慮して拒否されつづけ、単行本さえ出版された今なのに、この一章だけがまだ、どこに於いても発表してもらえなかったのです。

3

その後、と言っても、四十年はあまりにも長い時間でした。

日本、フランス、さらにウガンダ、メキシコなどの国々で、あのころに起こった出来事を少しづつ知ったのは、遙かに以後のことになります。当時、雪一面の草原で羊の群れを放牧する私たちは、過去の植民地主義のあらずしも、当時のパレスチナの地で起こった事件も、何一つ知らなかったのです。アラブの人々の口にするデイル・ヤシンという地名も、コウゾウなどの人名もちろん聞いたことがなかったが、確かに、たとえ聞いてもぜんぜん分からなく、同感も持てなかったでしょう。

唯一幸いと思われることは、当時私たちは、血統論に強い嫌悪の気持ちを抱き、変質させられた紅衛兵運動に訣別を告げ、

モンゴルという異族の地に向かいました。地の果て天の外とも言えるあの場所では、遊牧民は誰もが体制のシステムから外れ、官僚或いは奴隷の生き方を蔑視することに慣れているのです。まさかあそこが、元紅衛兵を骨まで作り直し、新しい人間にまで再生させる最もよい所だったということを、当時は知りませんでした。

こうして正義の最前線で戦えなかった私たちは、モンゴルの草原で他者へ近づこうとしていたのです。他者のために命を捨てることも惜しまなかった日本のアラブ赤軍を始めとする六十年代の先輩たちとは、当時まだ出会いがあるうとも思われなかったのですが、大きなまわり道に沿って歩いた末、会える価値ある地点で彼らと合流し得えたことは、今から見ると当然なこととしか考えられません。

合流までの回り道がどれほど長かったかについて、細かく数える必要もなく、省略してもいいでしょう。合流の地点だけを強調したいのです。そう、他者という目的地でしょう。他者の生存、他者の尊厳、他者の文明、これらの内容が、感性の鈍かった私のからだに注がれて続けた時間は、人生と並行して、今まで来てくれました。だが、他者という立場が、私の一部に変わるまで、なお二つ目、三つ目の文化と付き合う段階を経なければなりません。

モンゴルの次にカザフが続き、カザフの近くにウイグルも繋

がり、漢語を話すイスラーム教徒からイスラーム文明へ、知らないうちに異族の文化に身が浸みこみ、複数の彼らの豊かな考え方、習慣、言葉さらに立場は、徐々にこの自分のものとなって来ました。文明は、もしも既にモノではなく骨まで染み透る一種の常識や感情になってしまえば、新鮮な感覚が書く衝動となつて、筆を動かさし、言葉を捜す力になつて来ました。

ガンガ・ハラ―即ち「黒い駿馬」という古い歌が、モンゴルの知識人より早く気になつて自分を感動させ、そして作品のメロデーにしたことも、ハラヤマ・テプラナ即ち「黒い山羊に抱かれ」そこで救つてもらおうという草原の習慣を作品に使い、それを知らないモンゴル人の作家に解釈してあげたことも、自分の上手さを誇るためではなく、ただ元紅衛兵が如何に深く異族に改造され、異端となつていたか、そのことに、秘かに悦びを味わうだけのためです。

書いて試しながら、ついに鮮烈な抵抗史を持つ黄土高原に生きるムスリムたちの真中に辿り着いて、ジャフリーヤというイスラーム共同体への仲間入りが実現いたしました。

その後、昔なら他者という人々が今の現実において賛否をとにもする道連れとなつてゆく途中にあつて、私が彼らの一員になり彼らの歴史と心情を描写しているようになりました。この道の途中で夢中になつていっているうちに、いつの間にか人気作家として監視の目に見つめられつづけ、一時危険に身が晒されたことも避けられなかつたのです。一人で行くの慣れたものは孤

立してしまうのは当然です。昔一緒に文学から出発した作家の旧友たちはそれぞれ強国祭りが地位アップの活動にお忙しく、ムスリムを敬遠する態度を取つても不思議ではないでしょう。しかも、共同体が自分の書き手に資料を提供するのは当然なことですが、そのような恵みから生まれた小説から歴史書よりも多数の新しい資料が湧きあがつたことによつて、こんどは作家たちではなく、幾つかの分野の学者の恨みを買つたこともやむを得ません。

かつて『紅衛兵の時代』という書物を日本でまとめた時、なぜ元紅衛兵がイスラーム教徒になり得るかという質問に、答えるのが苦しかったことをまだ憶えています。ムスリムという家庭の出身にまで原因を遡るより、正義を求めて生きようという初心を叶えるところにこそ、本当の原因が宿されていると、今ならそう答えるたいのです。国内を見まわすと、つねに体制さらに暴政へ逆らう集団になる彼たちには一種反乱に似た快感が与えられ、世界へ目を開けば、帝国主義のプロバガンダの奴隷のような生存から脱出した生き方も貴重なものであつて、いくら辛くてもこれを放棄したくないのがわかりました。

さらにその後と言われれば、もつと有名になることを断念するだけで済まない、テロリストという悪意的なうわさが浴びせかけられてしまうことも、覚悟しなければなりません。しかし皆が祭りに騒いでいる時、ゲリラだけは網破りに専念してやる

のも、面白いことでしょう。実際に「遊撃の時代」という言葉をタイトルにしたこともあるように、建築、植物、考古、学術、歴史など、頻繁にジャンルを交換させながら書き続け、散文が駄目ならフィクションエッセイをつくり、さらに危険を恐れることになれば寓言か喩え話をも書こう、暗語だらけにしてわざと読者に分からないまま読んでもらうという小品は、少しずつ貯まりました。まさかのようなゲリラ的な文学活動をしなっていたずらの多かった昔を思い出させます。これからこれを私流（我流）のモダンリズムにして、ゆきどまりに向かおうと思う他に、申し致すことはありません

戦後の左翼運動から出発して中国古代史の解説に至った、京都の谷川道雄氏の「共同体論」に述べられた「反体制運動とは、古代から階級制度に侮辱されていた共同体の復讐」という言葉に、強烈な共感を抱く一方、さらに今日の講演会を企画して下さった四方田大彦さんの『白土三平論』に指摘している、下層の複雑さ及び「革命が成立した後の前衛集団の変節に対して個人が何をなし得る」。私はこの大きな主題を、自ら今後の人生に於いて、探し続けたいと思います。

新帝国主義の戦車の後ろで民主を唱える者とも、欧米価値観のゴミの中で詩人のカッコウにメーキャップする者とも、大きく違う道を歩いてからもうひさしい。私は、共同体の中に自分を位置づけることによって、昔の血統論も含め、すべての他者

差別と闘うことを誓いながらイスラームに身を投げ、同時に耳を澄ませば下層すべての複雑な音をも聞こえるよう、努力します。とうぜん日一日膨れている祖国で煽られている大国主義への批判にも、直面しなければなりません。言うまでもなく「中国で生きる」というスローガンを実践に移すのは難しい。しかし喩え彷徨っていてもそう歩き続けたいのです。

もつとはつきり行方を見すえたく、さらにこの胸をさっぱりするために、日本へ渡りました。なぜならと言うと、アラブ赤軍の名において、一九七二年において、世界現代史の正義かつ美しい一ページとして開かせた彼らの故郷、この国のどこかで、私の捜す答が埋もれているかも知れないのだから。

むすびに

ここまで語らせて頂きましたら、私的な文学などについては一切触れないようにしましょう。

私たちの昔に関する四十年にもわたった激しい議論評判の流れに、私は黙っていた時が多かったかも知れません。遠観的な傍観者や歴史に汚れないというきれいな者の発言に異議を申し立てながら、倒れた仲間を想い続けた私は、四十年を経てほえて忘れぬ過去の初心が、現実での正義への叫びに変わってほしいと願っております。微弱な作品によって自分の読者だけでも、パレスチナへの支援と、新帝国主義の侵略に苦しめられ

る人々への同情へ、さらにイスラームと呼ばれる抵抗前線への理解を、少しでも深くしていただけるなら、これ以上の喜びはございません。

長い間日本語を使わなかったという悩みを告白する暇もなく、ふたたび言葉の不備にお詫びを申し、辛抱強くこの乱れた気持ちを理解しようとしてくださった皆様に、感謝の言葉を申させ

て頂きます。

ご静聴、有難うございました。

二〇一〇年十月八日初稿
二〇一〇年十一月九日講演